

したという噂が流れたのです。それは日本軍の中から起っていました。ちょうどわれわれも宜野湾出身だもんだから、嘉数の駐屯部隊内でもその噂があり、あてつけがましくですね。「君たちの村長は捕虜になってスパイしてるんだ」と、それくらいあつけにとられた状態で捕虜になっているんです。だからあれは実際にはスパイしたということでないに、このへん一帯の住民全部が捕虜になってしまい、その中に村長もいたもんだから、そういうデマが出たときか思えませんか。

ところで嘉数戦線は、四月初旬から戦闘がはじまって、(私が負傷したのは十九日でしたから……)四月二十三日頃まで約三週間そこで持ちこたえたはずです。嘉数の小さい丘の綾線一帯でもって。それから浦添^{ウラゼ}村の前田^{マエダ}に攻めこまれて、そして首里へと戦場は移ったわけです。

嘉数のわれわれの兵力は、一個連隊ですから、約千名でした。それだけの軍隊が、四月下旬にそこから後退するときには、おそらく一割残っていたかどうか。普通、連隊副官というのは、優秀な中尉が大尉がしますが、そうした将校はほとんど戦死してしまって、士官候補の軍曹が連隊副官をしていたほどです。それから推しても、どれほどのすごい戦闘だったか。

われわれは機関銃部隊でしたが、一小隊に(二銃)で、一個中隊に(八銃)でした。それだけしかない機関銃に、弾薬は十箱しかありませんでした。三月二十二、三日頃から本格的な空襲がはじまったその時点で、それだけの弾薬を配給されたもんだから、「これじゃ戦争はできない」と、非常に不安でした。

番というあんばいで、二キロ三キロと北方へ進み出て、米軍の露営を逆襲する。そうした作戦を繰り返したのでした。

米軍の周辺には、電線が張りめぐらされてあって、夜襲するときそれが難関でした。それにふれて感電するものもいて、また感付かれると、すぐに猛攻撃を受けますから、相手に打撃をあたえ得ないことが悩みの種でした。しかしなんとしても相手に打撃をあたえなければならぬので、夜襲はすつと続けられました。暗闇の畑の中から進んで、米軍の近くで分散して隠れ、合図と同時に敵のいくつかの天幕めがけて手榴弾を投げつける。するとすぐ米軍の盲撃ちの反撃に合います。

毎夜、十人くらいの斬り込み隊を編成して出していました。帰ってくるものは一人か二人でした。出かけるときには、恩賜の煙草や少しのお菓子^{お菓子}を湯^ゆでといてそれで水盃をして別れていましたね。私は中隊本部と連隊本部との連絡員でしたから、その頃の夜襲には参加せずにすみましたが、戦果報告はいつも聞いていました。

夜襲では米軍にも多少の被害をあたえるけれど、こっちは死者が続出して、兵力がどんどん減少するので、これじゃあいかんというわけで考えられたのがタコ壺^{タコウ}です。

タコ壺と称する一人用の穴は、攻めてくる敵を奇襲するための、極めて簡単な罅^{ひま}穴で、その中に坐るとちょうど頭が出るほどの深さです。われわれは夜間にタコ壺を掘る作業をしましたが、もう敵の攻撃を防御することに重点がおかれていました。

タコ壺は陣地の周囲や、前方の、敵が通ってきそうな甘藷畑^{いも畑}のなどに掘って擬装しておくのです。そして一人づつ斬り込み隊をそ

しかしいざ戦闘がはじまったら、またそれだけの弾薬も使えないんです。というのは、米軍とわが軍の火力の差があまりにも大きすぎるんですね。われわれが陣地から、一連が三十発の二連、つまり六十発くらい撃ち出すと、二、三分を待たないで、米軍はすぐ追撃砲の集中砲撃をあびせるんです。

普通の戦闘では目標が幾らとか距離の想定をして弾を撃つはずですが、それが沖繩戦の場合は、事情がちがうんです。米軍は、弾のおちる真上にいるんですからね。上空では、グラマンとセスナが意のままに飛び通して、制空権は完全に握っているんですね。だから彼らは弾の落ちるのを見ながら無電でほとんど知らせて、的確な弾着でほんほん攻撃できるわけです。こちらは射撃どころじゃないんですよ。また、たとえば歩兵砲でも一発撃つと、もうこっちの陣地はめちやめちやに根こそぎやられてしまう。だから、撃つときはよほどの効果を狙ってでないと撃てない。そういうわけで、機関銃の弾薬は一箱しかあてがわれなかったけれど、撃つ機会がなかったのです。

そこで後からは、銃撃戦ではどうにも立ち打ちできないということになって、作戦が変えられ、それからは肉追撃をやったんです。米軍の攻撃は、時間やっていて、朝五時からはじまり、終るのは夕方七時頃で、その頃さあツとひいてしまふんですよ。実際の米軍の部隊は、野嵩^{ノソウ}・普天間^{フテンマ}・石平^{イシヘイ}・北谷^{キタヤ}付近においてあって、そこから嘉数戦線の日本軍に向かっ、て接近してきて、攻撃をはじめ、夕方になると後退する。だからわが方も、昼は嘉数戦線で敵の攻撃に応戦し、夜になると陣地の中から這い出る。夜はこちらの攻撃の

の中に忍ばせるわけですが、これはもう人間魚雷と同じですね。ダイナマイト十個くらいを箱に詰めた急造爆雷と、手榴弾とをかかえて敵がやってくるのをその中で待ち構え、敵の戦車がすぐ目の前まできたとき、捨て身で爆薬箱を投げつけるのです。それはせいぜい五、六メートルのところへ落ちて、二、三秒で爆発しますから、こちらの命が助かることはほとんどなかったです。一方、米軍の戦車は、この戦法で相当やられたようです。夜間に負傷者を救助に出かけたとき、われわれの部隊がやつつけた米軍の戦車が、嘉数の前や下の大謝名^{オオシナ}付近に十七台ほどひっくり返っていましたね。そこで米軍も作戦を変えました。

普通、戦車の後に歩兵がつかますが、あとからは歩兵を一応前進させてから、戦車部隊がきよったです。タコ壺を掃討してからある地点で戦車を待ち、そして歩兵は戦車と一緒に攻撃してしましたね。その頃からはタコ壺作戦も効果がなくなっていました。

タコ壺の中の斬り込み隊は、発見されたが最後、戦果をあげることも逃げることもできず、辛辣^{しんせき}と同様にやられるわけですが、それでも場所を変えて、タコ壺を掘る作業はつづけていました。結局、米軍をこさせないようにして持ちこたえるための唯一の防御方法だったわけですね。ま、非常に苦しい時間かせぎですね。

この最悪の状況でわれわれが考えたことは死ぬことでした。「死ぬことはこれはもう免れられないんじゃないか」と、覚悟していましたが、どうせ死ぬなら一発で急所をやられて死にたいと、そういう心境でした。腹部等を負傷した人を見ると、ほんとに気の毒でした。一日か二日は生きていますが、もがき苦しんでから、

必ず死ぬわけですから。その上われわれも死を約束されているようなものでしたから。

四月の中旬頃からは、こちらの方々の陣地という陣地は、昼間、米軍の馬乗りに逢っていました。その馬乗り攻撃でさんさん苦しめられましたね。陣地の入口や銃眼のところから、米軍は何時間も待ち構え通しますよ。入口や銃眼から射撃されても、地下陣地の中は曲りくねっていますから、奥に隠れているものはそれほど被害はなかったですが。

ところがあとになって米軍は、ガソリンを入口から流し込んで、火筒放射器で中を燃やすんですね。中はもうもうとものすごい煙が一杯になって、われわれは窒息死寸前になったものです。さいわい米軍は一時引き揚げたので助かったものの。それで次からは、われわれは水を準備して置いてタオルをぬらしてガスマスクの代用にしたりにして応急処置を考え、頑張ったんです。苦しまぎれに表へ一歩でも出たら即死です。しかし米軍は午前中やってきて正午頃には煙幕をまいて一旦退却するんです。そこでわれわれはその後すぐに入口にとび出して息をふき返すというやり方で対応していましたね。また二時か三時頃に米軍は馬乗りにやってきましたが、われわれは陣地の奥深くにじっとしていました。……その繰り返しです。

煙幕はものすごいもので、山や谷間ぜんたいが煙におおわれるんですね。嘉敷一带は大きな松が繁っていたところですが、煙がはれかかると、あたりは草木が砲撃でぜんぶ吹き飛ばされて、一本の木どころか、緑が全く見あたりませんでした。われわれが匍匐して下の方まで偵察に行ったとき、いたるところ土や石が掘りおこされ、

す。もう一人に訊いてみたら、いや気のせいだよと言われて、そうかなあとその方を見詰めていると人影が見えるんですね。三百メートル離れた掘り割り陣地の側面で見えるんですね。ここで私は「誰何^{いか}」しようとしたんです。すると、一人だと思ったら二、三十人がぞろぞろうつと駆け昇ってくるんですね。あっ米軍だと悟ったとき、ちょうどもう一人の歩哨は「もう交替時間だろう」と言いながら私の傍まできているんですね。私はとっさに彼をタコ壺に引きずり込んで、二人は狭い中に嵌りこむようにしてじっとしていました。

間もなく、われわれの部隊の陣地は馬乗りにされました。二人は午前中、身じろぎもせずそのままタコ壺の中にひそんでいました。距離にして七、八十メートルの所です。正午頃になって、米軍は煙幕を張って退却しましたが、そのためにこっちも発見されずにすみました。

それから午後三時すぎに、私は再び陣地の入口近くで立哨することになりました。もう一人は体格のいい古年兵でした。古年兵には頭が上らないので、彼のいうなりに、私は前方のタコ壺の中に立ち、彼は草で擬装された隙のある壕の入口に立っていました。そのうち突然、迫撃砲の集中攻撃を受けました。私は戸板やら土やらをかぶってしまいました。後でおし上げて戻ってみたら、古年兵は直撃を受けて即死しているんですね。その顔がまるで小学生のように小さいんです。不思議に思っていて、その死体を引き起したら、後頭部は骨も何もかもふつとんでいて、頭が前半分しかなく、顔の皮が縮んでいたんですね。

地形が変わり、一面真っ白になっていましたね。

上空では依然として敵機が飛び交っていました。面白いことには、アメリカの飛行機の接触事故が頻繁にあつたことです。グラマンは戦闘機でセスナは偵察機ですが、ちょうど山の斜面を両側から超低空でとんで来て、見ている間に接触事故をおこすんですね。するとたいいていセスナは一度にばらばらになつてしまい、グラマンは火を吹き出します。そんなときパラシュートで米兵が降りてくるんです。われわれは小銃や機関銃でそれを狙い撃ちして、完全にのぼしよつたすな。降りるまで生かしては置かなかつたですね。

しかしこんな戦い方ではどうにもならないと、われわれは思っていました。ただ、まだ二十歳の若さであり、軍隊教育が身に沁みていましたから、別に負けるという意識はなかつたですね。おそらく斬り込み隊でも負ける心境で行ったんじゃないかただろうと、思います。だから沖繩戦にのぞんだ時点においての、兵隊の心境は、嘉数戦線とそのあととは、雲泥の差があつたんじゃないかと、そんなふうに思っています。嘉数戦線では、まだ敗北的ではなく、その激戦が物語るように、米軍にも多大の被害をあたえ、沖繩戦の中で最も戦鬨的だつたのですから。

四月も下旬にさしかかると、米軍は勇敢にも夜襲をこころみるようになっていました。私は夜間、陣地の前方のタコ壺に、内地の召集兵と一緒に歩哨として派遣されてきました。二人は離れて別々のタコ壺に立っていたんですが、ちょうど夜明け頃になって集中砲撃がなりやんだとき、ヒヤーガアラ(比屋川)という前の掘り割りあたりで、急に何かがさつと物音がしたような気がしたんです。

こうして私は二度命拾いしたのですが、夜になって、負傷したのです。四月十九日でした。そのころすでに兵隊は半分以上戦死していましたが、とうとう私にも斬り込みの命令がありました。手榴弾をもって陣地から出て、百五十メートルほど行ったとき迫撃砲を受けたのです。集中攻撃がはじまったとき伏せればよかったものの、走り出したもんだから、タコ壺まで行かないうちに、瞬間あつしましたと思つたとき右足にショックを感じて後へ倒れてしまいました。至近弾の破片でやられたわけですが、何か大きな石をぶつつけられた感じでした。さわってみたら、自分の足がぶくぶくしていて大きいんですね。私は膝だとはかり思つてたんですが、実際は大腿部から一べんに骨も肉もちぎれて、右足は背中の下敷きになっていました。痛みも感じないで大腿部をさかんにさわって、「ああここは膝小僧じゃないんだなあ」と悟つたわけです。幸いにも陣地に近かつたもんだから、誰かが連絡してくれて、三十分ほどして衛生兵が助けにきました。私の右足はわずかな肉と皮でくっついてそのままじゃ運びにくい。それで衛生兵は薪でも割るようには短剣で私の片足を斬り捨てて、私を引きずって運んでくれたのです。

それから中隊療養所で出血の応急手当を受けて、すぐに当山の旅団病院にさがりました。そこは壕の中央を通路にして、両側に三段の棚があつて、負傷兵は重ねて寝かしてありました。私はその上段に寝かされました。足の痛みは何も感じませんでした。その夜、私は下の負傷者から突つかれて、「お前は小便しているのか」と言われたんです。自分では何も感じないので、おかしいと思いな

がら衛生兵を呼んで貰いました。衛生兵が灯りを持ってきてみたら、出血がはじまっていたんですね。板切れで作った台に毛布を敷いてあるだけだから、下にいる者は生ぬるいものが落ちるんで、小便だと思っただけでしょう。

衛生兵はヨードチンキの原液を持ってきてそれを傷口につけてくれました。つまり血管を焼いて止血したんですね。その手当を日に二、三回受けました。それからそこで私は大腿部の手術を受けました。その手術は残酷なもので、麻酔を全くかけないで、傷口を切ったって揃えるのです。肉を切られるときひどく痛むのです。骨を切るときは音がイヤなだけで痛みは感じませんでした。肉を切り、骨を鋸で切ったから、また肉を切るんですが、私は苦しみもがいて悲鳴をあげました。そのたびに衛生兵は、気合いを入れて私の顔を力まかせに殴るんです。またそんな気合いを入れないと私は持たなかったのかもしれないね。

四月二十五、六日に、私は首里の平良の師団病院に移されました。そこで前田戦線からきた負傷者の口から、嘉数戦線のその後のことを聞きました。すでに嘉数戦線は全滅状態になって前田に後退してきていること、軍曹が連隊副官までしていること。また、前田では作戦上の失敗があったことです。そのためつけられて生き残った石部隊と、こちらから行った山部隊とが、朝の五時に交替する時点で、折しも米軍から集中攻撃を受けてしまったんですね。だから石部隊は壕から出ようとしても出られず、山部隊は野ざらしのまま攻撃をあびて、相当の犠牲者を出してしまったんですね。

首里の平良の師団病院には約三週間滞在していました。そこできがきて、それで内地まで行けるんだというようなことを話し合ったりしていました。

ところが五月二十七日の海軍記念日に、米軍が与那原から上陸したという情報が入ったのです。前田も運玉森も落ちて、安謝・那覇あたりからも上陸して、首里は四方から包囲されたんですね。間もなく首里の日本軍が撤退する直前、与那原から上陸した米軍は、大里の山頂まできて、首里に向かってさかんに砲撃しはじめた。われわれの分院壕の上に米軍はきています。発砲するとき激しく響いてくるんです。それで分院もいよいよ危険だということで、翌二十八日、退却することになりました。ところが足をやられたりして動けない重傷患者は残されることになったのです。看護婦やら軍医やら辛うじて歩けるような患者たちまでみんな逃げるように立ち去って行ったのです。

壕内に寝かされたまま残されたわれわれは約三十名くらいでした。老年の軍医は穏やかにわれわれに訓示しました。あとでトラックを準備して迎えるから、ながくても二、三日だから、それまで辛抱して待っているように、と。そのときカンメンポを一人に二袋づつ手渡されました。それは二日分の食糧という意味なので、われわれは分院長の言葉を信じたのです。なんとかして救いにくるだろうという期待があったんですね。二日間、カンメンポを食いつくして、三日目からは何も食わずに待っていました。ところが三日たっても迎えには来ない、四日たっても来ない。壕の上の山では、米軍がさかんに砲撃している。壕の中で地響きがひびくんです。もうそこは米軍の包囲陣地になっているらしいんですね。

負傷者は皆が皆、素っ裸でした。それを当時の十六、七歳の女学生が看病していました。相手は重傷患者だし、身動きはできないし、食事やら排便やら、傷の手当やらするので、大変だったでしょう。負傷者の服は、手当をするとき、どこであるうがすぐ袂を入れて切り裂いていたし、着替えがあるわけじゃないし、シラミも多かったんで、裸にした方が便利だったんですね。

しかし日に日に負傷者はふえてくるし、砲弾はどんどん周囲にとんでくるんですね。――前田戦線、棚原戦線がどうにも持ちそうにないという状態になったとき、われわれ負傷者は夜間に、南風原の陸軍病院に移されました。ところが、そこは満員でみんな収容できず、大里村の高宮城という部落の分院に運ばれたのです。

運ばれるとき、負傷者は迎向けに暗の上空だけを見たままです。動きはできないし、どこに向かって進んでいるのか方向感覚は全くないし、なんとも不安な心境だったですな。そのもつとイヤな思いをしたのは、砲弾がとんでくるときです。担いでいる人達は、タンカをその場に放り投げて、逃げるんですね。それも当然だし、また死んで貰っては困るわけですが、あの場合の心境はなんとも淋しいものでしたね。それが首里から南風原をこえて大里の高宮城まで行く間に、何回もあったんですね。

分院についたのは五月十四、五日だったと思います。壕は三つからなっていて奥の方でつながっているということ、食糧も十分あるということでした。そこでの生活は、十日間ぐらいはまだ平穩無事でした。戦闘は運玉森付近だということでした。患者たちは、まだ夢みたくない希望を持っていて、与那原の海にいまに友軍の病院船

この状況ではとうてい連れ出しにはもう来ないだろう、もうわれわれは捨てられたんだと、寝たまま身動きできないわれわれは、そういう諦めの気持ちになっていました。

その頃、雨が降っていました。誰か壕から這い出して雨中へ出て行った者がいました。われわれは誰一人も動けません。昼も夜も何もしないで寝たつきりです。傷口は放ったらかしなのでウジがわいて腐れて行くんですね。それより苦しいのは、空腹で、痛いくらいひもじくてたまらないこと。壕の奥の方には、糧秣があることはみんな判っているんです。けれども誰もそれを取りに行ける人がいないんですね。「奥には米があるんだがなあ」と。それから水が欲しくてたまらない。壕のずつと先の入口の方には、まるく白い星の光がひかかっていて、そっちの方から雨が流れる水の音が聞こえるんですね。ところが水を汲みに行ける人もまたいない。普通、戦場で飲まず食わずといっても、わずかでも水は飲んだり砂糖キビをときには齧ったりして、何か少しは口に入れていたって管ですが、しかしわれわれの場合には、一滴の水も飲めなかったですね。

ずつと完全絶食です。それでもときどき互に声をかけて話し合ったりしていました。とりとめのない四方山話ですがね。もし生きのびられたら、家に帰ってどうしようという話やら、内地の自分の郷里のことや家族のことなど。ま、助からない病人たちが閉じこめられているようなもんですね。

その頃、壕から這い出て行った者が戻って来たんです。彼はひどく衰弱した声で言っていました。「は、南風原は、みんな殺られたらしいなあ」と。毒殺のことです。それからというもの、みんなは

非常に憤慨しました。「向うは殺ったというのに、われわれはこうして捨てられて……納得できない、なぜ院長は殺ってくれなかったのか」と。われわれは毒殺されたかったので、口惜しかったのです。

南風原の陸軍病院では、退却するときに重病人は毒殺したんですね。あれはおそらく病人も希望していたでしょうね。どうせ先の見込みはないから、帝国軍人の身をあたら敵にまかせるよりは云々といった気持ちでしょう。われわれも同様に、自決したい心境になっていたんですな。だからわれわれは分院の院長に対し憎しみの感情さえ抱きました。

聞くところによると、われわれの分院にもそういう命令が出ていたそうです。しかしわれわれの院長は、何もしなかった。私はこのことについて後でこんなふうに考えました。分院の院長は、白髪のままだった少佐軍医でしたが、職業軍医じゃなしに、応召軍医だったにちがひありません。いわばバリバリの若い軍医だったらすぐやっただけなのに、彼には住民の医療生活を重視する考えが身についていて、決断がつかなかっただろうと思います。どうせ死ぬんだから、無理して注射することは忍びないと。——そういう院長だったために、われわれは毒殺をまぬがれたのです。

しかしわれわれは、そこから救出されるまで院長を憎みつづけました。われわれの体は日に日に瘦せて、衰弱していききました。一週聞くらいしたらもう何も欲しくなくなってしまいました。私の大腿部は、腕くらいの大きさになっていて、ほんとに骨と皮という感触でした。それでもときどき誰にともなく話かけていました。名前を呼

何か説明しているようでした。そのとき、米軍に発見されたことを知ったのです。

そしてすぐタンカで壕から運び出されました。そのとき私ははつきり見たんですが、驚いたことに死人は完全に白骨になっていましたね。頭部の毛は少し残っていましたが、骨から肉はそげおちて何一つ残っていませんでした。

この約二十日間で、壕の中に捨てられていた三十名のうち、七名が生き残ったのです。壕の外に、生存者を並べて寝かされたとき、私は見るも憐れな同類をはじめ見ました。じつに意外だったのは、田中という人でした。その人はおやまみたいな声の持主で、和らかい奇麗な言葉づかいをする一風変わった人でしたが、見たらなんと七名の中で一番ごつい感じの馬みたいな長顔だったんです。「ああ、あなたが田中さんだったのか」と、みんな驚いていましたね。みんな骨と皮だけの裸で、髪と鬚はぼうぼうして、目はへこんでいて、互によくもまあ生きていたと思いませんよ。あと二、三日も発見が遅れていたら、私は生きては選れなかったと思いますよ。(絶食以後)壕の中では小便是一滴も出ませんでした。排尿する水分がなかったのですね。右足の大腿骨は五、六センチ突き出ていました。肉は縮んで腐っていてウジがたかっています。米兵が私に煙草をさし出しましたが、私は首を振りました。すると鉄兜に水を汲んできて飲ませてくれました。

それから壕の下の方へ運ばれました。小学校の前の広場でしたが、そこは仮捕虜收容所になっていて、数百人の避難民が集まっています。「こんなに沢山の人が生きていたんだなあ」と私は驚

び合うときもあるけれども、互に顔はわからないのです。皆、夜そこへ入ってきているんですから。声だけで相手が判るようになり、昼夜区別なく、互に確認し合ったりしていました。

カンメンポがなくなつてから四、五日は、腹部が痛いくらいひもじくてたまらなかつたですね。ところが一週間くらいしたら、なんにも感じなくなっていました。もう空腹感はないのです。全く骨と皮でしたが、それでも私たちは、話だけはしていました。

六月十日頃から、口数が少なくなり、起しても起きない者がでてきました。壕から一度這い出た男が、最初に永眠したようですね。

「ああもう逝ったんだな」と、そして次々と死んで行くのが判るんですね。「おい、彼を起してみてくれ」「まだ大丈夫か」と、互に毎日生きていることを確認し合うのですよ。そのうち死体が腐って、非常に臭いのです。しかしその臭いも二、三日したら感じなくなってきました。困ったことは、上の段の死人が腐敗して行くとき、その屍体から汁が私の上にはたりたり落ちてくるんですね。私の手は辛うじて動かせるけれども、脚の方は、硬直してしまい、動かなくなつていて、身をずらせることもできませんでした。

私は不意に目覚めるのですが、非常に眠くって睡魔に勝てませんでした。日に五、六回は目が覚めるのですが、意識朦朧としていて話しながらも眠ってしまうんですね。そしてだんだん目覚めるのが少なくなつて、一日に一度か二度ちょっと目が覚めるていどになっていました。

六月十八日の昼、誰かに揺り動かされて、ふと目覚めたとき、顔に懐中電灯が照らされていました。人声がすぐ傍で聞こえ、通訳が

きました。そこではじめて小さい空罐に何か混ぜた飯を与えられたのですが、食欲はありながら、半分ほどしか食べられませんでした。

その翌日、中部の水釜まで、トラックで運ばれました。そこにある米海軍病院に入れられ、その翌日、足を手術しました。全身麻酔をしての手術で、何も判らず、そのまま翌朝まで眠っていました。

その朝、麻酔が切れて傷口が痛みはじめた頃、水釜(旧北谷村)の海岸からタンカで水陸両用車に運ばれ、沖に停泊している輸送船に乗せられハワイに送られることになったのです。私は水陸両用車が走っているとき、横になったままで沖繩島を眺めたのですが、島全体が真っ白でしたなあ。緑は一色もなく、中部から島尻にかけて、ちようど石粉山(いしこな)みたいに真っ白になっていましたなあ。